

目次

序…………… 齋藤慎一 5

第1部 中世城館の史料論

南北朝内乱と城館——一三三〇年代の様相…………… 齋藤慎一 13

はじめに／1 戦乱と城館／2 構造物と戦闘／3 城館構築の様相／4 城館
の地域性／おわりに

南北朝・室町期南九州の城郭——『山田聖采自記』より…………… 高橋典幸 67

はじめに／1 島津氏の本拠鹿兒島 東福寺城と清水城／2 城郭戦と後卷／3
開 城／おわりに

守護所革手と正法寺の戦い——『船田戦記』覚書…………… 三宅唯美 85

はじめに／1 写本の概要／2 成立年代及び作者の検討／3 他の史料との照

合／4 革手の景観／5 三つの城館の変遷と機能／おわりに

大名領国における公的城郭の形成と展開―「城督」を手がかりに……………馬部隆弘 111

はじめに／1 「城督」の語義／2 「城督」の成立と受容／3 「城督」の役割
と制度的矛盾／4 城普請体制と「城督」の展開／おわりに

城館用語から見る南九州の地域性……………吉本明弘 145

はじめに／1 榕の研究史整理と問題点／2 「カコイ」の出現時期の見直しと
出現背景／3 カコイの史料上の用例／4 近世の「カコイ」と混用される「榕」
「榕」／おわりに

「寄居取立」と地域社会……………篠瀬大輔 169

はじめに／1 小規模城郭論の視角／2 問題の所在／3 寄居成立の諸段階／
4 「民衆の城」の終焉／おわりに

「戦功覚書」と城郭研究……………竹井英文 187

はじめに／1 「戦功覚書」という史料／2 城郭関係史料としての「戦功覚書」
／3 「戦功覚書」に見る城郭の構造／4 「戦功覚書」に見る城郭の周辺空間／
5 「戦功覚書」に見る城攻め／おわりに

第2部 城館の変遷と地域支配

平安中期における城館の機能と性格……………吉田 欽 213

はじめに／1 平安時代の武士と居館／2 安倍氏と柵／3 清原氏と柵／4

平安時代の居館／おわりに

中世前期の在地領主と町場の城館……………田中大喜 239

はじめに／1 地域の拠点的な町場と在地領主／2 地域の拠点的な町場に集う

在地領主たちの共同知行／3 地域の拠点的な町場の掌握と領域権力の形成／お

わりに

観音寺城の成立と展開―近江の社会・権力構造との関わりから……………新谷和之 265

はじめに／1 戦乱のなかの観音寺城／2 政治拠点としての観音寺城／3 地

域社会における観音寺城／おわりに

三好・松永氏の山城とその機能……………天野忠幸 297

はじめに／1 摂津を本国化した時期／2 畿内・近国を支配した時期／おわり

に

戦国大名宇都宮氏の支城管理体制……………江田郁夫 321

はじめに／1 石末城の概要／2 中世の文献史料にみえる石末城／3 宇都宮
氏の支城管理／おわりに

天正期伊達・相馬境目と城館……………垣内和孝 341

はじめに／1 金山城・丸森城をめぐる攻防／2 中島宗求と黒木宗元／3 伊
達・相馬境目の記憶／おわりに

戦国・織豊期の城と聖地……………中澤克昭 359

はじめに／1 近江の諸城から／2 信長の城と聖地／3 城と鎮守／おわりに

序

中世の日本列島には極めて多くの城館が営まれました。列島各地に残る山城跡は、中世社会を象徴する存在といえます。ましよう。

一九八〇年代以降、これらを歴史学の資料として活用しようという意識のもと、残存遺構をもとに平面構造を分析する作業が各地で精力的になされ、パーツ論や縄張り編年、分布論など数多くの議論へと結実しました。また、発掘調査の進展により、出土遺物の編年や遺構の類型化が可能となり、城の存続期間や地域的差異を示す重要な成果が公表されています。

振り返ってみれば、一九八五年八月に行われた第二回全国城郭研究者セミナーについて、村田修三氏はコメントを読売新聞に寄せています（読売新聞 一九八五年八月一六日 夕刊）。「幅広い視野から討論が繰り広げられた」ことを踏まえつつも、考古学研究者から突きつけられた「城郭を軍事史的な視点だけでなく、地域支配のあり方としてとらえるなど、生活者を含む多様な観点から研究する必要性」について、軍事施設であることに独自性のある城郭を扱う場合、まずその独自面にせまる縄張り研究が重視されねばならない。両者は必要条件と十分条件の関係のようなものであろう。このように疑問をなげかけています。「住居調査の枠をでないような城跡調査の多かつた傾向に対して、縄張り図を書き歩いてきた城郭研究者から不信感がなげかけられたのも無理からぬことといわねばならない」と書き

続けるように、この村田氏の批判は縄張り論の立場からの発言でした。

これに対して、橋口定志氏は即座に反応しています(「一九八五年の動向 中・近世(東日本)」『考古学ジャーナル』二六三号 一九八六)。橋口氏は村田氏の見解を、考古学の立場から「著しく異なる見解であり、その出发点から疑問視せざるを得ない」と厳しく評価しました。橋口氏が注目したポイントは二点あり、ひとつは中世城館の「その成立・展開を見通した時、果たして軍事施設であることに独自性を狭めてよいのだろうか」と、中世城館の理解をめぐって従来の自説を再論した点でした。今ひとつは「その出发点から疑問視」することに繋がる「城館研究が、敗戦前の要塞研究の枠組に縛られた『城郭』研究の水準から早く脱却することを望む」とした点でした。

橋口氏の自説とは、

中世城館は、すくなくとも、地域におけるある階級の他の階級に対する支配拠点であり、その具体的在り方を示すものである。それは一つに一定の地域における地域史研究の進展の中で、より具体的に論じなければならない課題であろう。

と主張した点です(「最近の中世城館の考古学的調査例から」『貝塚』一五 一九七五)。この主張が先の村田氏の理解と対極の位置にあたることになりました。

この両者の論争を見たとき、縄張り図作成者と考古学の立場で、対象とする城館の認識が大きく異なることが認められます。村田氏の城館に対する認識は一九八〇年代頃の縄張り論者の認識を如実に物語っていることになりました。このことは当時まさにその渦中にあつた編者自らも認めるところであります。詰まるところこの論争は、城館についての理解、いかえれば城館の概念をめぐって、両者で生じていた微妙なズレが原因となり、顕然化した論争だつたと考えます。あたかも二つの立場の研究者の同床異夢のように思えるのです。

一九九〇年代の初頭、青森県浪岡町に所在する浪岡城のシンポジウムのなかで、石井進氏は次のような発言をして

います(石井進「中世と考古学」中世の里シンポジウム実行委員会編『北の中世』日本エディタースクール出版部 一九九二)。
中世の城とは決して単なる軍事的要塞というだけのものではない。むしろ中世における集落、都市の一種でもある。一見すると、「えっ、これが本当に城なの」と思われるところに実は浪岡城の大変大きな意味があるのだ、何故ならそれによって、中世の城の重要な側面が明らかになる、それを通じて都市や集落がそのような性格を帯びざるを得なかった、中世という時代の特色が明らかになるのだと、私は申し上げたいのです。

この発言に先立つての発言ですが、北海道上ノ国町の勝山館を素材とした鼎談の中でも同様な見解が網野善彦・石井両氏より次のように示されています(網野善彦・石井進・福田豊彦『沈黙の中世』平凡社 一九九〇 一二四頁)。

(網野)「だからこれまでの城に対する捉え方は根底から考え直す必要がある」

(石井)「まさにそうだ! 従来 of 城の捉え方は、簡単にいえば軍事的拠点論一本槍であり、それがただちに階級支配の拠点論にスライドしていくんですよ」

二〇世紀後半の時点まで、城館研究は縄張りを軍事的に観察する方法、いわゆる縄張り論が大きな役割を担っていました。その方法論は現時点でも有効性をもっていることは間違いありません。しかし、二〇世紀の終わりに近づいた頃、一乗谷朝倉遺跡や葛西城(東京都葛飾区)などの考古学的調査が実施され、考古学が中世の分野を解明し始めるようになると、中世考古学の役割に期待が寄せられるようになり、さまざまな事実を明らかにし始めました。そして一九九〇年代は成果が各地のシンポジウムで問いかけられた時代でした。その時代のなかで文献史学の網野・石井両氏は城館の存在形態について疑問を提起したのでした。

つまり、二〇世紀末において、「城とは何か」という議論が生まれたと言って良いでしょう。しかしその議論は継承されているとは言い得ません。このような研究史のなかで文献史学の立場で、文献史料を精査し、「城とは何か」に取り組んだ議論は乏しかったのではないのでしょうか。

そのような状況のなかで、研究の足下を揺るがす動向が起ります。埼玉県嵐山町にある「教科書のような」とも形容される技巧的な縄張りをもった杉山城について発掘調査報告書が発刊されたのです（『埼玉県指定史跡 杉山城跡 第1・2次発掘調査報告書』嵐山町教育委員会 二〇〇五）。この報告書の刊行は城館研究に大きな課題を投げかけました。折しも総合的な歴史学研究が模索されているなか、個々の方法論がぶつかり合い、総合的な歴史学を構築することの難しさを如実に語るものになったのです。しかし、個々の論点を点検すると、その方向性は明らかに became とも思えます。

考古学への批判の焦点となった瀬戸美濃大塚編年については、編年そのものの問題は以前よりの考古学の課題でありました。また、杉山城の年代分析にあたっては遺構の状況および遺物の組成を論点としていることから、瀬戸美濃編年の問題を論点として批判したことは的外れなものでした。また文献史学の「梶山陣」の解釈への批判も、「梶山陣」＝杉山城であると単線的に結び付ける視点からの批判であり、提起した側の意図をくみ取ったものとは言えないものでした。したがって、考古学および文献史学による反批判を出す必要がない現状にあります。

他方、縄張り論からの杉山城論は複雑な様相を呈したものでした。提示された築城者および年代が多様であったため、縄張り論の方法論の客観性に対して疑問のまなざしが注がれる結果になったのです。詰まるところ、縄張り論自らが築城主体や年代の推定は、縄張りの検討にあたっての第一義的な課題ではないとする発言にまで至りました。縄張り論にとって、自らの方法論を問題とせざるを得ない「杉山城ショック」といえるような状況であつたように思います。この一連の議論は考古学・文献史学・縄張り論それぞれが拠つて立つ個々の方法論について、その限界が、それぞれにそして相互に確認されたということが一番のメリットだったように思います。

しかしながら、今もって、総合的な歴史学研究を模索し、その上で「城とは何か」を追求する課題に変更はないと考えます。そしてより成熟した段階に進むことができるようになったように思います。個々の方法論を点検し、そし

て相互に補充し、城館の実像を追求し、新しい歴史像を築くこと、この原点に立つことが揺るがず、あらためて大事なことであると思うのです。

この研究状況に正面から取り組んだのが、萩原三雄・中井均編『中世城館の考古学』（高志書院 二〇一四）ではなかったでしょうか。これまでの考古的な調査研究の成果を総括的に扱った研究書を目指したという、考古学からの城館研究の視角を示した書であったと思います。

発刊をうけ、早々に発表された竹井英文氏の批評が目を引きました（書評と紹介『日本歴史』八〇五 二〇一五）。竹井氏は縄張り研究においてメジャーな議論であるパーツ論を考古学の立場から取り組むものの、陶磁器論など考古学独自の課題が取り扱われていないと批評しつつ、考古学が縄張り論の側へ踏み込んで、あるいは従前の縄張り論がフィールドとした範囲まで切り取って議論を組み立てることに注目しています。つまり同書は考古学のなかに、縄張り研究の素材を引き込み、独自の世界を構築することを目指したものではないでしょうか。したがって発掘調査をともなつた、より精度の高い次元での議論が要求される段階へと、議論が高度になり、縄張り論にとつてはより厳密な議論を要求される状況を生み出したように思います。考古学による城館研究の新しい舞台が目指されたといつてよいでしょう。

それでは文献史学に望まれるものとはなんでしょうか。これこそが本書の課題と言えるのではないのでしょうか。その際に冒頭の村田・橋口論争を踏まえつつ、石井・網野両氏の遺言でもある「城とはなにか」、この命題に立ち向かうことが要求されているように思います。無論、この命題は文献史学のみならず課されたものではありませんが、史料語彙に含まれる概念を厳密化し、城館がもつ機能を明らかにすることがまず目指されるべきことと考えます。城館に関する議論が盛んになっている今日ではありますが、「城」の語彙が一人歩きし、概念規定が曖昧なままになってはいないでしょうか。かかる状況は、城館研究において文献史学の方法論が根づいていないことにも起因すると考えます。

城郭の構造そのものに関心をもつ研究者の多くは、文献史学の方法論に通じておらず、関連史料の収集や史料批判が不十分なまま、縄張り研究や考古学の補完材料として史料を援用することがしばしばあります。一方、文献史学の研究者の多くは、城館の機能や役割そのものには注意を払ってきませんでした。

このような関心から、「同時代史料から中世城館がどこまでわかるのか」という分析を全国的に集めることで、文献史学の立場から中世城館研究を提起したいと考えるに至りました。あらためて「城」の概念規定を模索することが必要なのではなからうかと考えるに至った次第です。その足がかりが本書によって築かれたかどうか、この点は読者の判断に委ねたいと思います。

二〇一五年七月

齋藤 慎一